

77年は芸術流出元年となるか

今年美術界は、内外ともに、新しい表現や議論が期待できる状態ではない。とはいえ、一方でビデオなど新しいメディアの利用開発が広まり、他方で絵画・ドローイングの再評価に象徴されるごとく、諸メディアの固有性が吟味されるという分極化現象が、いっそう進むだろう。この傾向は七〇年代全体の兆候ではあるが、今年あたり、どれだけその議論が深まるかに関心が集中しよう。

六月開催の西独カッセルのドクメンタ展が主テーマとして取り上げる「メディアとしての美術」という考えは、その点で注目していい。

諸メディアの固有性とともに、諸地域の文化的固有性がいっそう意識されはじめている。九月のパリ・ピエンナーレがラテンアメリカ特別展を企画するのもそのあらわれだが、ヨーロッパで日本文化の紹介を望む声がますます高まっているのも、そのことと無縁ではなさそうだ。

九、一〇月、イギリスで行われるエジンバラ・フェスティバルは、大抵な日本の前衛芸術のショーを予定している。日本の芸術にとって前衛とは何か、近代あるいは現代とは何かを問い直すいい機会となろう。

ところで、美術の内外交流というと、日本では情報過多であるかに考えられがちだが、本当は逆である。ジャーナリズムは外の動きを決して十分に伝えてはいないし、実際の作品や作家に触れる機会は、今年もありなさそうである。今年予定の「毎日国際展」は開かれない。

逆に、前記ドクメンタ展が初めて日本在住の作家を参加させる（高松次郎、原口典之）。一月開館のバリ、国立ポンピドゥー・センターは、こけら落としのマルセル・デュシャン展について、ニューヨーク在住の日本人作家河原温の個展をやるという。

いずれも結構なことにはちがいないが、生存中の邦人作家の個展は開かない主義の国立美術館、新しい美術がどうなっているのかを一般に知らせるために企画展をやるにも予算がないという国立美術館、こういう施設に頼るほかないわれわれ同胞は、外国旅行団でも組んで日本の現代美術を見に行くほかないのだろうか。ともあれ、日本人芸術家の内外での評価のギャップが急速に進みそうである。芸術流出元年などとならねばいいが――。

(剣)